

# キウイフルーツの環状はく皮技術について

近年、キウイフルーツの価格が安定して生産意欲が再び盛り上がり、果実の肥大を促進するための、環状はく皮が実施されるようになってきた。環状はく皮の効果は明らかで、樹体の障害等も発生せず、安心して実施できる技術であることを確認したので紹介する。

キウイフルーツの果実の肥大率は受粉後1か月間が最も大きい。しかし、はく皮処理の時期は果実の生育期間であればいつでもよく、L果以上(116g以上)の割合に大きな差はない。

一方、処理時期が遅いほど糖度が高くなるので、肥大と品質の両方の向上のためには7月中旬頃から始め、肥大の鈍る8月中旬頃までに完了するように行うのが良い。



写真1 はく皮処理の状況

表1 翌年の発芽率・着花数

処理区 (処理時期)	発芽率 (%)	花数 (個/本)	
		母枝当り	結果枝当り
1994 6月	69.6	52.7	4.0
7月	64.2	46.3	3.9
8月	71.6	53.0	4.2
無処理	66.1	49.5	4.3
1995 2年連年処理	53.9	42.5	4.1
無処理	59.4	46.5	4.4
1996 3年連年処理	64.0	27.3	3.2
無処理	63.6	25.2	3.0

写真1は、主幹部へ幅1cmのはく皮を1週間おきに合計4回処理したものである。効果を確実にするには1か月程度の遮断期間が必要であるが、はく皮した組織は、約1週間でゆ合するので、傷の治癒具合をみながら数回続けて処理を行う。

また、2年連続、3年連続処理した場合でも果実肥大効果は変わらず(図1)、樹勢や翌年の発芽率、着花への影響は問題にならない程度であった(表1)。

貯蔵性を示す果実硬度、追熟の容易、糖度酸含量は、はく皮処理による影響はなく、むしろ優れる傾向であった。

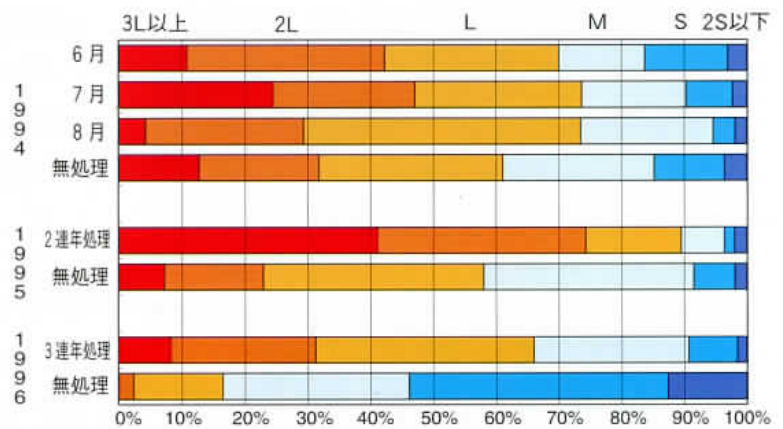


図1 階級別割合

当試験では、はく皮処理を主幹部に行ったが、主枝、側枝に処理しても同様の結果になる。更新予定の側枝等は、積極的にはく皮処理を行うとよい。

環状はく皮は、効率よく大玉果生産を図るうえで、徒長的な強い枝を母枝として利用する長梢肋骨整枝にピッタリの技術といえる。

(鬼北分場 主任研究員 森口 一志)

**編集発行** 愛媛県立果樹試験場  
〒791-0112  
松山市下伊台町1618  
TEL 089-977-2100  
FAX 089-977-2451